
IS-インフィニットストラトス-篠ノ之束の弟子

rei

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS - インフィニットストラトス - 篠ノ之束の弟子

【Nコード】

N1965BA

【作者名】

rei

【あらすじ】

『IS』

その開発者である篠ノ之束は誰からも新の意味でISを理解されなかった。彼女の認識できるものたちは誰一人としてISを理解できない。使えるだけでは意味がない。彼女が求めていたのは理解してくれる人だった。そしてそんな人物が現れた。その人物は後にこう呼ばれるようになる

『篠ノ之束の弟子』と

束唯一の弟子（前書き）

なんとなく息抜きで書き始めました

感想募集中です

それとIS - インフィニット・ストラトス - 知識を求めるものも
できれば読んでみてください

束唯一の弟子

『篠ノ之束』

稀代の天才であり世界を変えたISの生みの親でもある

しかしながら非常に気難しいというかとらえどころがないというか
とにかく他人嫌いが過ぎる性格ゆえに自分とその身内しか認識しな
い変わり者である

そんな彼女が認識できるのは4人

ブリュンヒルデ『織斑千冬』とその弟『織斑一夏』そして自分の妹
『篠ノ之箒』の4人である

それ以外の人間は認識しないらしい

しかしそんな彼女が姿をくらませる時に一人だけ連れて行った人間
がいたのだ

他人に対して関心を持たずまた、認識もしない彼女が世界から狙わ
れ姿を隠すというときに一人だけ連れて行ったのだ

その人物は彼女が認識できる4人ではなくまた一切の経歴が不明の
人物であった

??? side

ここは某所にある研究所

某所というのは実際のところここがどこだかよくわからないからだ

あの時急に束さんに連れられて世界を点々とすることになったからだ

束さんは開発したISにより世界から狙われる身

それによりひとつの場所に長いで見つかれば最悪命の危険すらあるという状況

それに動向している俺は束さん以上に危険な状況にあった

束さんはその能力ゆえにかまっても殺すには惜しいだろう

なので殺される可能性は低い

しかしながら俺はそんな能力もなく向こうからすればなぜか一緒にいた少年という認識のほず

さんざん拷問されたあげく殺されるのは目に見えている

なので逃げるときはそれこそ死ぬ気で逃げた

そのため何とか今まで生きているのである

それにしてもなんで俺ここにいるんだろうね？

俺は確かに両親を早くに無くしてそれから一人暮らし状態だったので別に誰も心配しないんだろうけどなんで束さんが俺を連れてくるのがよくわからない

別に俺は天才じゃない

もともと俺と束さんは知り合いというほどの間柄でもなかった

俺は両親を早くに無くしている

そしてその両親が研究者であってことからよく家にある両親の残し

た研究などを見ていた

それによつていろいろな知識をつけ論文も読んだ

そしてあるとき束さんが提出した論文を読んだのだ

それがISに関する論文

今までの科学の常識を覆すような内容

当然その学会では相手にもされずむしろ笑われたようだ

しかし俺はその内容に興味を持った

書かれている内容は今までの常識からすればありえない内容

しかし彼女の言う定理が本当ならば確かに実現可能な内容だった

俺はもともと自分の目で見ることを文献よりも信じている

なので直接本人に尋ねにいった

最初は束さんは俺が自分の妹と同じぐらいの年であることと他人であることからろくに相手にしてはくれなかった

しかし俺は束さんの論文を何回も読みそれに関する考察を束さんに提出し続けた

そして次第に束さんもとりあつてくれるようになった

今では一緒に研究するほどになっている

しかしだからこそわからないのだ

なぜ束さんは俺と一緒に連れて行ってくれたのか

何度聞いても「それはね〜れ〜くんだからだよ！」とよくわからないことお言われて明確な答えが帰ってこない

いつかわかるといいんだけどね〜

東side

やあやあ天才篠ノ之束だお！だおだお！

今私はれ〜くんと一緒に地球上にあるあるところに隠れている

や〜自分でやったこととはいえなかなか面倒だね〜逃げるのって
まあ天才の私だからなんてことはないんだけど面倒であることに
変わりはないんだよね〜

といっても他人に邪魔されることなく研究できるからいいんだけどね

さて、世界に対して逃げている私だけど実はこの旅には同行者が
いるんだよね！

世界でただ一人、私のISに関してあの『白騎士事件』前に興味を
もってくれた人物

そしてもしかしたら鍛えれば私をも超えるかもしれない逸材

それがせきれいれい鶺鴒玲くん

通称れ〜くん！！

いや〜まさか世界にはこんな子がいるとはね〜

束さんもびつくりだよ！

最初は特に意識もしないようなどうでもいい存在だった

これは本当

でも彼は私の論文から考えられることを考察して毎日のようにもってきた

最初は面倒だし興味もなかったから読むこともなかった
でもいい加減うっとおしいので見てみることにした

そして驚いた

まさかここまで理解しているなんて

しかも論文には書いていなかったISのコアの製造方法の考察やそれを集中管理するための方法などの考察書かかれていてそれは私が考えているものと同じかそれ以上のものだった

だから気づいた

彼は0から1を生み出すことはできない

でも1を10や100にすることに關して天才なんだと

だから私は姿を隠すとき彼を連れて行った

私の持ちうる知識のすべてをあたえて彼がどんなものを作るのかに興味があった

なにより彼は初めてISを理解してくれた

たぶん今でも彼以上にISを理解しているのは私以外いない

ちゅちゃんはもちろん篝ちゃんもいつくんも理解できない

それを理解できる初めての存在

だから一緒につれてきたんだ

彼がこれから生み出すであろう物を見せてほしい

どんなすごいものができるのかを見せてほしい

そのためなら私は自分の持ちうるすべてを教える

れくんはよく自分をなんで連れてきたのかを聞いてくる

だから私はそのたびにこう答える

「それはね〜れくんだからだよ！」

せきれいれい
鶺鴒玲

彼は世界で始めての対等の存在

そして私の持ちうるすべての知識を持つもの

束唯一の弟子（後書き）

感想評価お待ちしております

IS学園入学「前」(前書き)

なぜか息抜きで書いているほうが更新が早いという・・・

感想評価お待ちしております

IS学園入学「前」

玲side

「はあ、IS学園ですか・・・」

あれからいろいろあり俺は14歳になった
今年で15歳になる俺だが東さんに突如IS学園に入学するよう言
われていた

確かに俺はISを動かすことができる

これは俺と東さんが一緒にISの開発をしている時にわかったこと
なのだがどうやら俺は男でありながらISを使えるらしい

原因はわからない

というよりもなぜISが女性にのみ反応するのかもわかったはいな
いのだからそれも当然かもしれない

これに関しては生みの親である東さんも首をかしげているところ
ある

世間ではわざと女性にのみ反応するようにしたなどといわれている
が本当のところはそうではない

もともとISのコアは自己学習をするように作られておりそれが何
らかの形で変異してしまったのではないかと俺と東さんは考えている
が、本当のところはわからない

さて、話がそれたが俺はなぜがIS学園へ入学するように言われている

「しかしなんでまた急にそんなことを？」

「それはね、れくんの専用機の試験をするためだよ」

俺の専用機

それは俺を束さんの共同開発により出来上がった世界最強のIS
しかし俺をベースに作っているため使えるのは世界で俺だけという
代物である

そしてここでは確かにその性能実験をすることができないのである
そのため完成はしているし武装も問題はないのだが実際の戦闘はし
たことがないのである

「あそこは世界の代表候補生とかが集まるから性能実験にはちょうどいいでしょ？」

「まあ、確かにそうですね。でも大丈夫なんですか？俺って一応お
尋ね者なんじゃ」

俺は束さんと一緒に行動してるため世界から狙われる立場にある
しかもおそらくは束さんにつくほどに危険な状況だろう
仮にも俺も束さんと一緒に行動している

ということは必然的に研究などの情報、現在位置などの情報を持つ
ていると思われるはず

そのため俺が捕まるということはそのまま束さんに迷惑がかかると
いうことになるのだ

だからこそ俺はためらう

「大丈夫大丈夫！それに今年は篝ちゃんといつくくんが入学するからね。れくくんも一緒に通ったほうが都合がいいんだよ」

「それはどういう？」

「篝ちゃんは私の妹でいつくくんはちくちゃんの弟。そしてれくくんはこの束さんの弟子。ここまで言えばわかるよね？」

なるほど

確かにここまで重要人物を集めておけば逆にそれを狙うものたちをおびき寄せやすい

そもそもIS学園は在学中は外部からの交渉を受け付けられない独立した存在

そして狙ってくる敵がいるのなら俺たちは学園で迎え撃てばいい
実にシンプルな図式ができあがる

「なるほど。理解しました。あいつらを誘い出すつもりなんですね」

俺は束さんの目的に気がついた

俺たちをひとつに場所にそろえることにより一番食いつくであろう存在がいるのだ

「うん。あのうるさい亡国企業はえを一掃しようと思うんだ」

俺たちは亡国企業とは何かと縁がある

まあ腐れ縁なのでこちらからすれば願い下げなのだが

あそこはISのデータを狙う中でも一番うるさいのである

いままでにも何回も襲撃されている

一度危なくやられるところだったこともある
それゆえにここいらでたたいておきたいのだ

「なるほど。でもいけるんですかね・・・俺中学も通ってないです
し」

「心配は要らないよ。なんとかするから。ちゅちゃん」

なんとも見事なまる投げ振りである

「はあ、まあ千冬さんもご愁傷様です」

「あはははで、通ってくれるよね？」

ここで通ってくれない？ではなくくれるよね？と聞くあたりやはり
東さんだ

先ほどはああいったがもうすでに手を回してあるのだろう

この人はなんだかんだで抜け目がない

いや、実生活では抜け目だらけではあるが・・・

しかしこういったことに関しては本当に抜け目がない

しかもこういうことは必ずといっていいほど事後承諾なのだ

そのため俺が何を言っても時すでにおそいことが多いのである

「ま、いいですよ。こいつの性能実験もしたいです」

俺は首から提げている黒いペンダントを見せながら言う

こいつは俺の専用機の待機状態である

「あはは、そう言ってくれると思ったよ　じゃあ明日入試に行ってきたね」

「はい、わかりました・・・って明日なんですか!？」

話が唐突過ぎる。すこしぐらい前もって教えてくれてもいいのに。

まあ、束さんはいつもこうだから今更とやかく言うつもりもないけどというよりなんとなくこうなることがわかっていたからなんともいえない気分なわけだが
すこしぐらいこういつて予想は外れてほしいものなのだが・・・

「^{しゅうりゅう}神龍の調整も終わってるんだしちょうどいいよね?」

神龍というのは俺の専用機の名前である

本当はもつとふつうのあたりさわりない名前にしようと思ったのだが束さんが譲らずまあ名前ぐらいでなにか変わるわけでもないの
そのままになっている

しかしなんとというか中二感ばりばりのネーミングだよな

束さんがいま作ってるISだってなんかそんな感じの名前ついてたし

「はあ、もうすでに決定事項なんでしょ?でも明日ってここからIS学園まで結構時間かかりますよ」

ここ日本からかなり離れたところにある某国のある場所である
場所は詳しくはいえないのだがすくなくともすぐにつくような場所ではない

飛行機を使ってもかなりかかる距離である

「だから今すぐでもらうことになるね、なにせ待ってるのはち」

「ちゃんだから遅れると怖いよ？」

「なにやら面白そうに言う束さん

この人これが目的だな？」

「この人のことだ

「IS学園にしろどこにしろなんだかんだでハッキングして映像を入手するに違いない

そしてそれをみて楽しむということをやるのがこの人なのだ

「やれやれ、こついうところで才能発揮しなくてもいいでしょうに」

「千冬さんですか・・・遅れたら命なさそうですね・・・」

「あの人は時間にするさいからな・・・」

「一応何度か面識はあるのだがそのたびに束さんをアイアンクロード沈めるところを目撃している

「なんとというか人間の限界を超えているような人だからな

「なにせブリュンヒルデなんて呼ばれているのだ

「そのひとにもし本気起こられるようなことがあれば・・・想像したくないな

「はあ・・・命の危機感じるんで行ってきます」

「いつてらっしや〜い」

束さんの満面の笑顔で見送られ、俺はIS学園に向けて出発した

まじで間にあわなかったらどうしよう

そんなことを考えながら俺は飛行機に乗るためにまずはこの山を高速で降りていくのであった

あ、もちろんISSつかってだよ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1965ba/>

IS-インフィニットストラトス-篠ノ之束の弟子

2012年1月4日23時56分発行